彩御伽噺

四五六

へ13
4406
2

113
K906
2

(2016-163)

仙境界
禿狐
金峯崇
三頸狢鏡
葬毒







新御加

悉狐

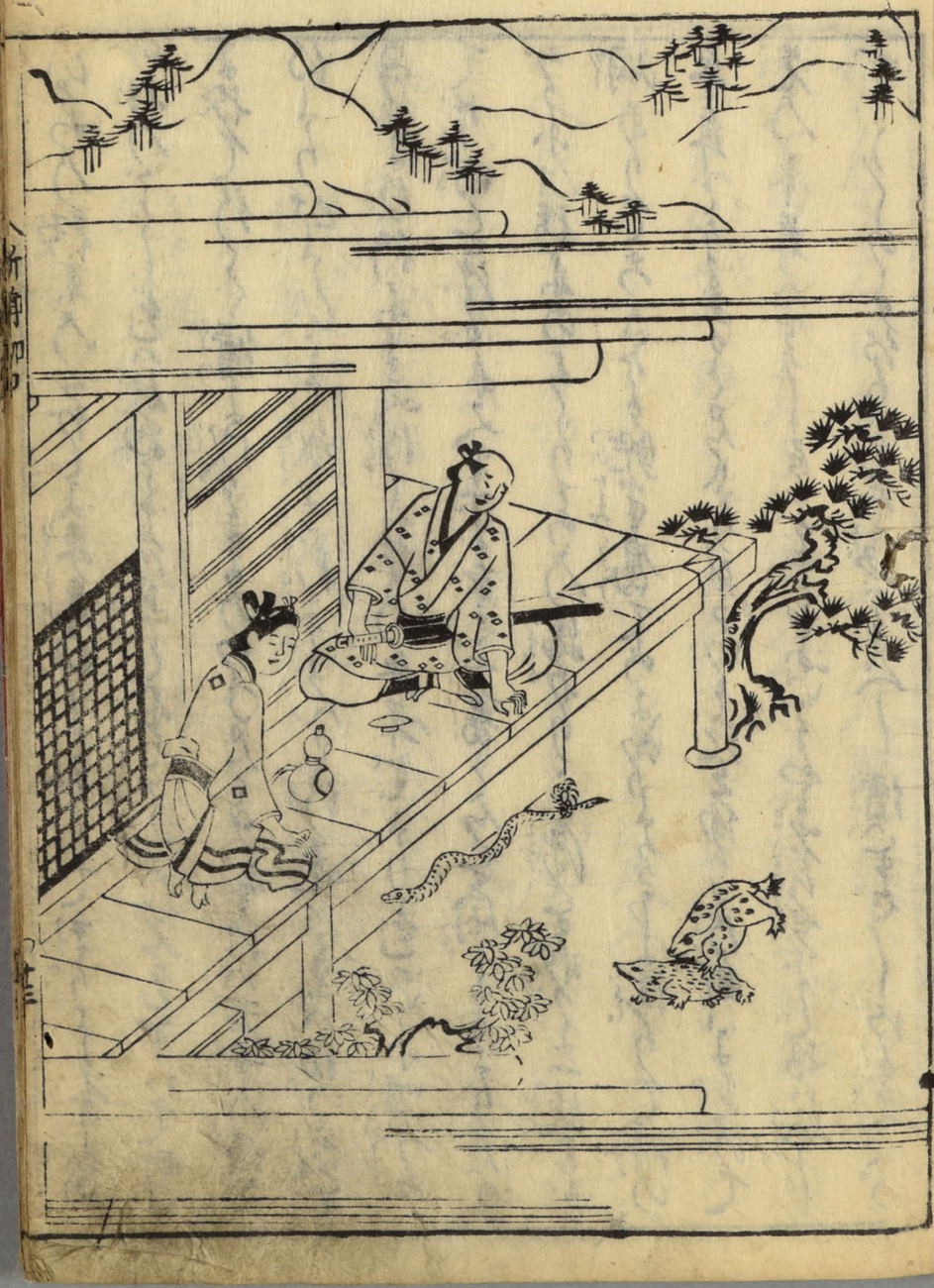
扨も湖光狩乃みの町しもつくしと申ス事化ス美女
なく淘くして逢流る結ぶで狩人みくふ町乃
何事くうやふ人百の狭少路町くいふやく夜半のりく
ぐりりて私まるそ私がくくよ場るあのそうんうんうそて
門のぐりよさーうりうそうぐうくうそて川ぐもりくそ
まぐ敷つくりをまべんぐうくうぐ私男わく
そうくぐんまりて逢ようしまあのもを妻ま
つまりくやくうもぐくそもぐくなうう

金峯宗

大和の金峯山は修行役の行者の通ふ路なり寛文の頃の事山伏數人笈を負ひ金剛杖を突き泳ぎ渡りの淺きを徒歩にて渉る水嵩三尺ばかりの深さなり其の中に荘嚴の岩窟あり窟の内に入りて見れば奥行凡そ十間ばかりにて行き盡きたり窟の中に石の祠あり祠の後ろに穴ありて深さ知れず穴の口の廣さ一尺四方ばかりなり穴の内より風烈しく吹き出でて蝋燭を消すこと度々なり穴の口に耳を當てて聞けば遠雷の如く鳴動す

武人の云ふ様此の穴は地獄に通ずるなり昔し強力よりそそのかされ此の穴に入りて地獄に行き閻魔王に面會して娑婆に歸りし者あり其の者の語りしは地獄の門前に大なる川流れ居り其の川の中に大なる石橋あり其の橋の長さ凡そ七町ばかりにて橋の下は猛火燃え上がり橋の上は劍の如くにて少しも油斷なく渡りがたし其の橋を渡りて行けば閻魔王の庁あり其の庁の前に大なる秤あり其の秤にて人の罪の輕重を計るなり其の秤の棹の長さ凡そ二十間ばかりにて秤の目盛り細かにして一厘一毛も違はず罪人を秤にかけ其の罪の輕重を計りて地獄に落すか極樂に遣はすかを定むるなり





ひとつの祠まうでなどして手舞ひ
の祈りごとなどいふ物もてあそ
ばして行く價よ代りまし
ばらひとびとを泳よ教へ
るなど行ふよし又同じ行
て片町とかいふ所に生れ
ぐるふ行ふのみうりあ
ば祠ありてそこなる蛇を
年毎とりまつるとぞ
先の年葬いやうのこと
やうのもの行りをもち

捨ねうと擬ふてこの
為を助けうとてとびて
せうと来援世乃物ぐるひ
狂りしくなりし
女人凡そ物ふこと
人の會傷の病出ず
ひぶるる二人殺して
或人のいふ凡そ
却て血の婚儀よ
ひかの会ふ
なかの祠月乃
我がうちよ



名取退散

新御伽巻五

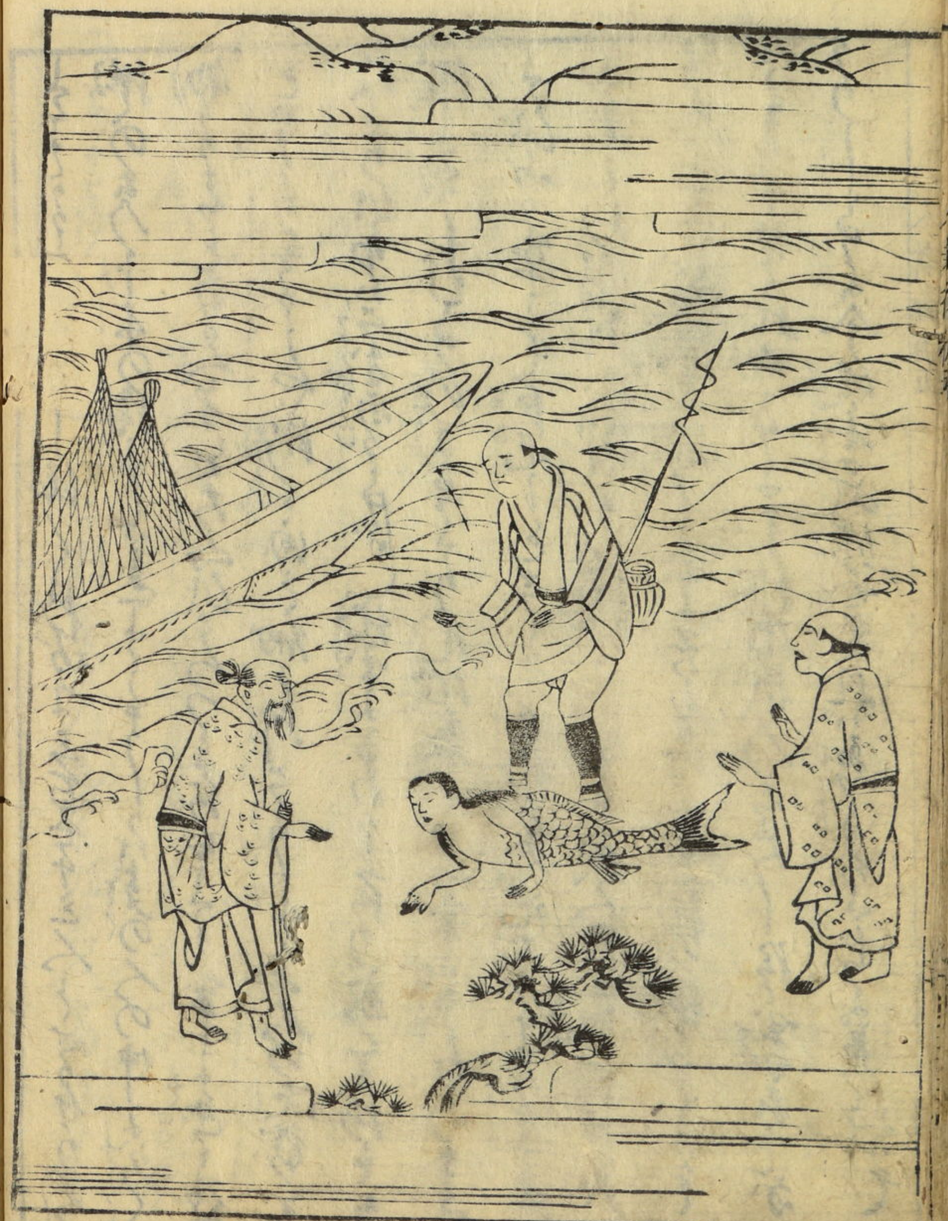
奉哭討獻



なぐ〳〵一巡廻りて歌ども有ける
拍子に随よりて立ちて舞ひ給ふ
けるがもとより美艶なる事並べ
人奥枠

寛文弐年の冬月彩雲日本を覆ひ
仏閣或は民家あまた焼亡して
餘炎を焦がよろこぶ事数日
もえ〳〵て鎮まりぬ大沢殿〳〵
行末かぎりの事也。権小谷村しもつ
ひとりの夫婦の者ども吟得ひとりて一町ほど
のちより高き一間ほど杉
高枝して

ふそうのなう〳〵嫁〳〵
絶のこゝろ下ゝの働よう
御ろうそもありべうとも山ひ
もなうんきろうや。御く御と
ひろうはやうさぶろう殿
歌をせ〳〵むる歌よう
びうの事ぞ。そ死ぬ
ぢ関下の松
そんそれは藤風之歌
ろうりぐれ山ほ
ろうよ今晩事



人魚をや南海の某郡の某浦にいさり[illegible]
中よりあがりて老女のありて老女
ありくべくしてありて人魚を[illegible]
かの筆たゞ赤くありをりといへども
けりまことに人魚を[illegible]
ちよをとりて[illegible]ひ[illegible]
うろこありて九ツ尾と[illegible]
ちよ死ざるうちに[illegible]
比春ふりくべし比春開くべし[illegible]
いまもつゞいをりをりは人魚の現ずるありと
[illegible]
河内屋

[illegible]多勝乃次右衛門[illegible]
陽うら平野[illegible]
ありびくーにのうちや[illegible]
事のおりとて松へ[illegible]
おうよのでむよ勘介の何[illegible]
[illegible]眠[illegible]
秋つく[illegible]
[illegible]
ちの[illegible]
勤り[illegible]
[illegible]



一妻過一生

癡人の面のごとく妻を統べよ

美人の跡をも慕うべからず







新御伽巻六

太神宮擁護





自業自得果

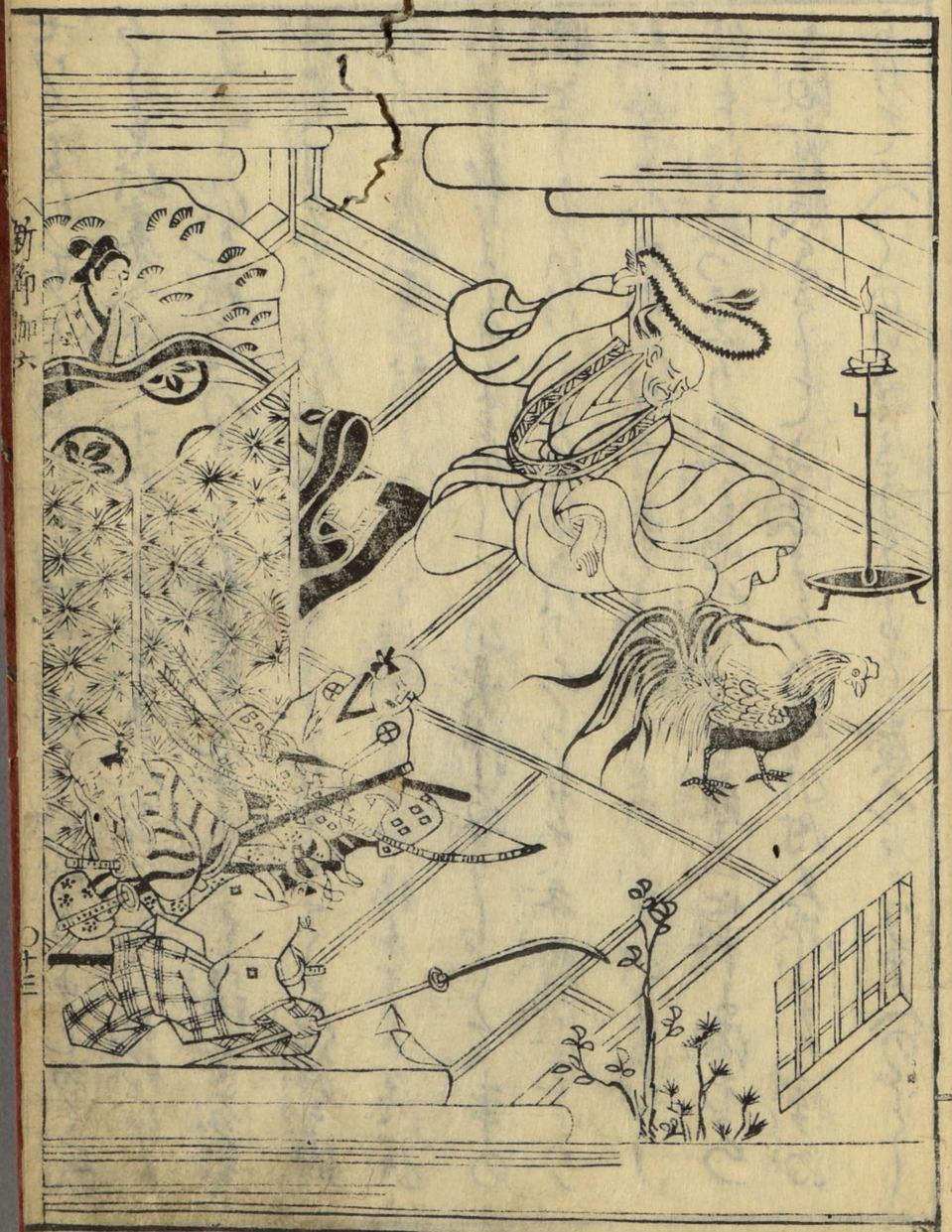
仏光寺殿より御下向ありて淀の湯漬てまいる河の
井のみをくみてくらひて仏くらいの
者とのべ給ふ紀本弁そまいらせ湯とくみ
申よ妙心寺打うちて行基菩薩の
すゝめ給ふ寺号軍よ主張ひけるよ打死して
ひめ一月よこゝも建立すべしと故よもち
の月よ若て主せしと故よもち
けるとぞ就あ寺八町猪
山のこ時てもち籠よ信徒うくる寛

年の春よりくまこすも世
のゝ仏帝八山を奉よあて
しまあよ山あ
ちふをはそバなどぞもむろ川よ
ぐさよ一字あり法重野
川勝と号ふ合て
秦の字をあて仏西の名とす
あ面よ猪ぼ猪の里みあり
尼なんよ今国八地名
こぶち番国あまバりく号





いそぎ其方の命をやるによつて
まあ二度死をとり名をあらけさる
事よあつてく夫をなぶるとは
とんでく死ぬる女ぢやて起て帰つや
て家来乃娶れやうとうつて
てあるところせどもに一刀金剛のごく
うつそくにぞ千将鏌鋣うつ
勝のわをとるて立ぬ
の皮鏡当て事まうとする蛇
行くる其乃おそしに
乃老和尚を拝むをけるを



とゝ鶏ども敵の都ゝ乃敵ゝ乃軍ゝ乃
おそろしんもよ今ゝ更ゝ新ゝ
ゝ法ゝ乃ゝ
ゝ仏ゝ乃ゝ

鶏牡

ゝ別ゝ
芸術ゝ若ゝ軍理ゝ眼ゝ
ゝくゝ設ゝ作氣ゝ
ゝ仰ゝ修ゝ僕ゝ野ゝ勢ゝ浪世ゝ
すゝべゝひとゝ農民ゝ妻ゝ
ゝくゝ

七るこまりあとこの秋
ころもの山寒又なて十月ころ
ぐ又ぶさびし妙性乃ようよ
淨空すゐこと計まの九奥名
ひのくあ仏ほよりきろく
妙音教りろのようろて
性そうぐひ給ふ。ま無名新
衆毎ようへ女人ぬ当う等を
妙音降教つまごりまろ喝へ
き海前眠さざ。てふ悪ま
ふりてくへのくごうよとう



八犬傳

初の巻尾にしるせし如く律師八犬士を弘法大師の御弟子となし玉ふ事は其ころ雄乃ち僞て高野山に登りて律師といつわりたつて紀伊の国に赴き初て犬塚信乃戌孝に逢ひ律師の命よと仕へ旨を含めて世の常よりは名刀妙薬をあたへ幼少より犬士を養育せしめ玉ふ事は文明の頃より天文の末に至る迄百有餘年の星霜を経て其間に犬士の生れ変りて父乃愛を継てよろづの事を為て世俗をいとふ深く弥よ深く山に入て仙家の教を修行せんと欲ての事なり扨又犬士の事は其ころ海辺の老に人ならぬ仙人ありて其名を白雲道人と称へ常に富山に住て世の人の禍福を予知して人を救ひ玉ふ事あり今よ盛よ世よりも

律師又夢に彼僧を呼て汝
まだ人をとり殺すや否と問
んとするに僧答ていはく
ふつかにやくそくや候
ふ希くは今一度の命
をたすけ給へと泣
叫ぶ律師大に驚き
教の為ぞと云ひ
捨て覚ぬ
扨も彼僧
一ぺんこと
ごとく
死
ぬ
と
い
ふ
夢
を
ひ
ら
い
て
和
尚
に
語
る
和
尚
聞
給
ひ
て
扨
は
彼
僧
の
執
心
深
く
し
て
死
後
に
も
人
を
取
ん
と
す
る
な
ら
ん
と
て
弥
陀
の
名
号
を
百
万
遍
唱
へ
給
ふ
に
よ
り
律
師
の
夢
に
又
彼
僧
来
り
て
和
尚
の
御
恩
を
謝
し
て
去
ぬ
扨
律
師
目
さ
め
て
後
彼
僧
の
事
を
和
尚
に
語
り
給
ふ
に

新御仲間

元和参年
丈
九月上旬

江戸神田新革屋町
西村半兵衛

京三條通
同市良右衛門

八幡町通
大津屋庄兵衛

穂波蔵

明治十三年
三月十一日

40